

日本二十六聖人上陸記念碑

1596 年 10 月に四国沖でスペイン船サン・フェリペ号が難破したとき、日本の当局に対し、船長は軽率にも「スペインはまず宣教師を送りこみ、それからコンキスタドル（征服者）を送ることによって海外の領土を征服してきた」と発言しました。事実上の日本の支配者、豊臣秀吉の反応は、迅速かつ厳しいものでした。秀吉は外国人宣教師と信徒を捕えるよう命じました。

26 人の殉教者のうち、24 人は京都と大阪の南にある堺で捕らえられました。耳を削がれた彼らは、真冬の寒さの中、ぼろ布を着せられ裸足で約 1,000 キロの距離を歩かされました。途中でさらに 2 人のカトリック信徒が加えられ、合計 26 人となりました。

一行は彼杵（そのぎ）から船で大村湾を渡り、1597 年 2 月 4 日の深夜、時津（ときづ）に到着しました。翌日の早朝、彼らは浦上街道を通して長崎に至る最後の 12 キロを歩きました。そして、西坂という長崎を見晴らす丘にたどり着くと、十字架に磔にされ、槍で刺されました。江戸時代（1603-1868）、彼らが亡くなった場所は「伴天連不浄地（外国人司祭の不浄な土地）」と呼ばれていました。